

第5回木更津市立小中学校適正規模等審議会会議録

○開催日時：平成21年12月22日（木）

午後1時30分から午後4時30分まで

○開催場所：木更津市役所6階会議室

○出席者氏名

審議会委員：佐伯康子、川名和夫、青柳敬子、石井徳亮、坂井麻貴子、
豊田雅之、池田利一、金子邦夫、山口嘉男、加藤淳、石渡宏

教育委員会：初谷教育長、栗原教育部長、露崎教育部次長

（教育総務課）星野副課長、藤尾副参事、山口主査

（事務局 学校教育課）高澤参事、竹内副課長、石井主幹、
安見主査、鶴岡主査

○議題等及び公開非公開の別

議事 (1)中間答申内容の検討：公開

1 開会（佐伯会長）

ただいまより第5回木更津市立小中学校適正規模等審議会を開催します。

2 会長あいさつ

本日は第5回目の審議会となります。

これまでに審議してきました、本市における適正規模・適正配置、市街地・新市街地の小中学校の適正配置につきまして、中間答申作成に向けて、審議会としての意見の確認、もう少し議論を必要とする点の審議など、本日も前回同様に内容の濃い会議になるかと思えます。よろしく願いいたします。

3 教育長あいさつ

みなさんこんにちは。師走というお忙しい中お集まりをいただきまして、ありがとうございます。

会議の次第に、中間答申という文字が出てきたのは今回が初めてです。富士登山でいうと8合目あたりでしょうか、これからが苦しいとよく言われていますけれども、いままでの論議の内容について整理をしていただきたながら、中間答申に向けて一歩二歩と進めていただきたいと思えます。

よろしく願いいたします。

—資料確認—

- ・ 中間答申構成案
- ・ シミュレーションデータ
- ・ 地図

4 議 事

佐伯会長 それでは本日の議題に入ります。

議題の（１）「中間答申内容の検討について」です。

中間答申案の構成は、これまでの審議の流れに沿ったものになっています。具体的な内容について、この構成に沿って検討していきたいと思えます。

表紙の次に、目次、はじめに、そして幾つかの項目が書いてあります。

まず「Ⅰ 小中学校の現状」については、１の「年度別児童・生徒数の推移」から３の「学校別学級数の推移」はグラフなどを使って説明をして、４の「学校別規模、施設、配置等の現状」は、これまでに私たちが作成してきた１８校の「規模、施設、配置等の現状」を載せていきたいと考えています。

そして、「Ⅱ 本市における適正規模」ですが、まず１の「適正規模の基本的な考え方」については、木更津市の適正規模は１２学級から１８学級とするという結論にこの審議会で達しまして、その経緯として、適正規模を考えるにあたってどのような規模が適正といえるかという考え方の前提は私たち委員のなかに当然あったわけで、話の席にも何度も出ていました。それを改めて文章化して中間答申に盛り込みたいと考えています。

次に２の「小規模校・大規模校のメリット・デメリット」について、これも審議のときに表にまとめて話し合いました内容を載せたいと思えます。

次に、３の「適正規模」についてですが、基本的な考え方に基づいて、大規模校と小規模校のメリット・デメリットについて考えながら、また、国の基準も参考にしながら、１２学級から１８学級を適正規模とするといった内容の結論を記載していきたいと思っています。

よろしいでしょうか。

— 委員賛成 —

石渡委員 小規模校・大規模校のメリット・デメリットのところ、小規模校のデメリットの文章表現ですが、確かにデメリットに書いてあることだとは思いますが、小規模校でも工夫してデメリットを解決しているといった実践校もあると思えます。ですから、「少なくなる」とか「乏しくなる」とかという文末は、もう少し教育的配慮のある表現がよいと思えます。

佐伯会長 言い切っているところは、もう少し工夫の余地があるということですか。

石渡委員 各文の後半について、もう少し教育的配慮を持ったほうが誤解を生まないのではないかと思えます。

佐伯会長 断定的な言い方ではなく、文章の後半はもう少し弾力的な言い方をするといいことですね。

石渡委員 はい。

佐伯会長 わかりました。

それでは、「Ⅲ 本市における適正配置」に入ります。

1の「適正配置の基本的な考え方」につきまして、これは構成案の5ページですが、前回の審議の最初に7項目にまとめて共通認識をいたしましたので、これを載せたいと思います。

ここまでは、今まで審議会を重ねてきた過程での内容を答申案として載せることができるかなというところです。

川名委員 適正規模の基本的な考え方は大筋でこれで良いと思います。ただ、1点目に「適正規模を確保すること」と言い切っていますが、以下は配慮するとか考慮すると言っています。「通学の安全性を確保する」というのはこれで良いと思いますが、適正規模は確保すると言い切ってしまうのでしょうか。言い切ってしまうと、12から18に押し込めてしまうということにならないかと思ったのですが。ちょっと曖昧かもしれませんが、「適正規模に近づける」とか、可能な限り適正規模にもっていくような表現にしておいた方がよいのかなと。そうしないと、地域の特性とか、施設の現状とかを考慮する場所がなくなってしまうのではないかと思います。ちょっと余裕のある表現にしたほうがよいのかなと感じます。

佐伯会長 「基本的」というところに戻りますね。適正規模を確保することを基本的な考え方とするということですね。そう考えると納得がいくのではないかと思いますがいかがですか。

川名委員 了解です。

佐伯会長 それでは、「適正配置の具体的な方策」についての検討に入りたいと思います。

今回は、前回あまり議論をしなかった点と、前回審議会としては一応見解は出したけれども、その後調査をしてみたら疑問が残ったという点、それと前回の結論が、「一つの小学校から一つの中学校へ」という基本方針から外れてしまうので、もう一度検討をしたほうがよいのではないかと3つの観点から出たことについて検討したいと考えています。

答申には、適正配置の方法として、統廃合、通学区域の変更、学校予定地の利活用の3点を念頭におきながら、前回審議してきたことと今日審議をすることを加えて、今年度審議の対象としました18校を規模別に分類して、具体的な方策を含めた検討内容を記載していくというスタイルをとっていきます。

前回の審議でのご意見をまとめた結果、各小中学校の大まかな結論は構成案のとおりですが、結論がはっきりと出なかった学校や、もうちょっと審議が必要な学校が何校か出てきました。

また、前回は個々に学校を見ていくことが中心で、隣接校や小学校と中学校の関わりに留意したところと、そうでないところがはっきりしてしまいましたので、前回よりも更に視野を広げて検討を加えていきたいと思えます。

今回もう少し審議が必要だと思われる学校は、西清小学校、波岡小学校、波岡中学校、東清小学校、清見台小学校、木更津第二中学校です。これらの学校について、検討していきたいと思えます。

まず、西清小学校につきまして、前回の結論ですが、「適正規模を下回っており、敷地が狭く借用地があるなどの課題はあるものの、今すぐ解決する課題はない。将来的には不便さを克服する統合といった可能性も考えたほうがよい」ということでした。

地図を見ながら考えていきたいと思えます。

西清小の児童は、中学校に進学するときに木更津第一中学校と木更津第三中学校に分かれるというのが現状です。

一つの小学校が二つ以上の中学校に分かれるというのは好ましくないというのが、この審議会の重要なこだわりの意見です。

ところが、西清小学校の児童がみんな木更津第一中学校か木更津第三中学校に進学するという事は、それぞれの中学校の位置や通学区域を考えると、両方とも難しいということでした。

それでは、前回統合という意見がありましたので、一中に進学する児童を一小に、三中に進学する児童を祇園小へ統合することで、一つの小学校から一つの中学校に進学できるようにするという方法は取れないでしょうか。

このことについて、事務局にシミュレーションをお願いしましたので、事務局説明をお願いします。

安見主査

まずシミュレーションデータについて説明します。このデータは10月1日現在の住民基本台帳より作成してあります。シミュレーションですので、区域外就学は考慮せず、全ての児童が指定校に進学すると仮定してのデータになっています。そのため各学校とも、実際の児童生徒数、学級数とは異なっています。

次に表の見方ですが、各年度ごとに、その年に入学する1年生の人数を示してあります。1ページの①の表をご覧ください。22年度において木更津第一小学校に入学する1年生は61人、学級数は2学級となります。その年度のほかの学年の人数と学級数については、1年生の列から左に順に2年生3年生というように見ます。その年度の学校全体の人数及び学級数は、下2行に示してあります。22年度でいうと、木更津第一小学校は全校で児童数466人、学級は15学級ということでした。

では、西清小学校について説明します。西清小学校の児童は二つの中

学校に分かれて進学しています。中学校から二つに分かれる西清小を、小学校から分けたらどうなるかということで数字を出してみました。まず県道の西側、木更津第一中学校に進学する西清小学校の児童を木更津第一小学校に統合してみました。1ページをご覧ください。現在の第一小学校は適正規模です。それが西清小学校の一部を取り込むことにより、20学級を越える大規模校となります。次に県道の東側、木更津第三中学校に進学する児童を祇園小学校に統合してみました。2ページをご覧ください。現在の祇園小も大規模ですが、更に大規模化してしまいます。

佐伯会長 今西清小学校を統廃合するということを考えると、一小は適正規模から大規模校になって、祇園小は更に大規模校になるということです。それでも西清小の子どもたちが二つの中学に分かれるよりは、規模は大規模になってしまうけれど、最初から一小と祇園小に分けることによって、小学校が終わった後に分かれることなく、一つの小学校から一つの中学校に行くことができるということです。

現在の西清小学校の規模については、「規模、施設、配置等の現状」を見るととても人数が少ないですね。

星野副課長 「規模、施設、配置等の現状」をご覧くださいますと、西清小学校は21年度は児童数263名、普通学級は10クラスで、適正規模には至らない学校です。

佐伯会長 一つの小学校から一つの中学校へ行くということと、学校の適正な規模ということはどう考えていけばよいかというジレンマのなかで、どういう選択をするかということになりますね。

青柳委員 一小にしても西清小にしても、歴史のある学校で、地域の方々も学校があって当たり前という感じだと思います。ただ、市街地を考えると、旧市街地というか、もともとある市街地の学校というのは、前回と今回の資料から見ても、児童数は微々たる増加で、そんなに伸びるところではなさそうだなと。少子化が進むなかで、いずれ、ある時期において、学区を変えていくというのはやむを得ない、いつかはやらなければいけないことになるのかなと思います。

佐伯会長 西清小学校を統廃合するより、学区の変更で対応していくべきと。

青柳委員 一つの小学校から一つの中学校へという考えも含めて、学区の変更も統廃合も両方とも当てはまるかなと思います。

佐伯会長 いずれは、統廃合を含めて検討していくべきということですね。

石渡委員 一つの小学校から一つの中学校へ行くということも大事なことだと思いますけれども、東京都のほうは義務教育から学校選択制をとっているところもあります。通学の安全性も重要だと思います。

川名委員 一つの小学校から一つの中学校へ行くという考えは賛成です。できれば小学校を分けて中学校に行かないほうがよいと思います。

現在さかんに地域と学校・家庭のつながりの大切さが言われています。学校や家庭だけでは子どもは育てられない、地域が関わって子どもを

育てていこうと。地域とのつながりはどうなのかなと考えると、中学校が分かれて、町内会や子ども会が分かれるとなれば、地域としては非常に戸惑うんですね。できればそういうことはしたくない。

非常に難しい問題ですが、西清小学校は学校が狭くて神社に走りこまないと十分な直線がとれないとか、そういうことも考えると、将来的には、なくなるのも仕方がないのかなと。

青柳委員 地域の住民というか、地域の力はとても大事だと思うのです。地域性を重視して考えていく必要があると思います。

金子委員 この地区はよく知らないのですが、子どもの生活圏のようなものはどうなのかなと。県道を境に子どもたちが日常の中でも離れているのか。単一の自治会とか、子どもたちの生活圏が交流があって固まっているということであれば、はじめから一小、祇園小に分かれてもいいのかなと思います。地域性とか、通学の安全性とか、基本的な考え方から推すと、そう思います。

加藤委員 統廃合を考えるのは責任の重さを感じますが、幸いなことに、西清小学区は中学校区で地域が分かれていますので、一小と祇園小に分かれたとしても、地域でまるっきり新しいことが全て始まるわけではないということを加味すれば、小学校の段階から二つに分かれるということも、断腸の思いでしょうけれども、十分考えられると思います。

川名委員 西清小学校から三中に行く子は学年10人くらいですよ。大勢のなかに10人がポンと入るとしばらく寂しい思いをするものです。それも考えると、県道の東側の子はちょっと遠いけれども祇園小に入れて、将来的には西側の子を一小へというのがよいかなと思いました。ただ、当面西清小は残し、これからの子どもの数によって、ということで。西清小をなくすというのは、まだ早すぎないかなと思います。

佐伯会長 地域とのつながりや生活圏、通学の安全性を考えながら、今後の児童の推移によって、いずれ統廃合を検討するべきとの結論になりますね。

次に、波岡小についてですが、前は大久保小学校の予定地の活用が少し出た程度だったので、もう一度審議をしたいと思います。

波岡小学校は、学校が学区の南西の端にあります。通学の安全性に問題が生じていて、現在の敷地には借用地があるという課題もあります。これらの問題を何とか解決しよう、適正配置をしようというとき、大久保小学校予定地の活用も考えたほうがよいのではないかと思います。これについて、何かご意見はありますか。

豊田委員 前回、波岡小学校単体ではなくて、畑沢小とか八幡台小もトータルで考えたほうがよいのではないかという発言をしました。

畑沢小も以前学区変更があって、地域コミュニティは中学校区で動いている部分があり、小学校区としてはそれが分断されてしまったりということがあったので、近々戻すとなると、ようやく追いついてきたコミ

ユニティがまた混乱することがあるかと思えます。

佐伯会長

そうですね。また一からということになるということですね。

この辺のことについて、事務局シミュレーションしてみてください。

安見主査

波岡小学校については、位置が学区の端であったり、通学の安全性にも課題があるということなので、波岡小学校を大久保小学校予定地に移転しつつ、八幡台小学校の大規模化を解消するために通学区域の見直しをした場合のシミュレーションをしてみました。

3 ページ①の表をご覧ください。現在の八幡台小学校は16学級の適正規模ですが、今後の推移を見ていくと、25年度には19学級になり大規模化していくことが分かります。加えて、この学区には羽鳥野という人口が増えている地域がありますので、これよりも学級数は増えるかと思われま

す。大久保小学校予定地に波岡小学校を移転するというので、大規模化していただく八幡台小学校の一部区域を移転する波岡小学区へ編入した場合、例えばこの道路より西側を移転した波岡小学校へ編入したとします。そうすると、残った八幡台小は③の表のとおり13学級で適正規模となります。羽鳥野の一部を編入した波岡小学校はどうなるかというと、4ページの⑤の表をご覧ください。現在小規模校の波岡小学校は、18学級の適正規模となっていくま

す。次に、18年度に畑沢小学校から波岡小学校に学区変更した地区の児童を畑沢小学校に戻したらどうなるか、5ページの⑦の表をご覧ください。八幡台小学校の一部を取り込んで、畑沢小学校に一部戻した場合の波岡小学校は、21年度は11学級、22年度以降は12学級と、適正規模校となっていくま

す。⑧の表をご覧ください。現在の畑沢小学校は大規模です。そこに波岡小学区から戻すと、更に大規模校になりますが、⑨の表の児童数の推移に注目してください。21年度は1,014人、27年度は748人と、今後児童数の激減が予想されます。

27年度以降適正規模に近づくことも考えられそうな結果となりました。

星野副課長

補足ですが、今回のシミュレーションは大久保小学校用地を活用したら適正配置がなされるのではないかという中でのもので、羽鳥野地区の一部の通学区域の線引きは、あくまでも机上で出しているだけです。線引きにはあまりとらわれず、将来に向けた方向性をご審議いただきたいと考えています。

佐伯会長

大久保小学校予定地への移転を考えると全て丸く収まるような感じですが、さきほど豊田委員が言われたように、学区再編後やっと地域に密着してきたところがまた元に戻ってしまうのではないかといった心配、一方で300名くらい畑沢小学校も児童数が減っていくであろうと考えられる点など、学区の再編を行うほうがよいかどうかにも関わって

るわけですので、ご意見をお願いします。

石井委員 波岡小学校のとなりに127号が走っていて、交通の激しい道路に接しており、一部通学路は道路幅が狭いうえ交通量が多く危険であるということですが、127号より西側から通われている子どもの人数、学区が変わったときに残された地域に何人くらいの子どものいるのでしょうか。

安見主査 127号より西側の波岡小学校の学区はあまり住宅がないところです。
星野副課長 滝沢地区というところがあるかと思いますが、港南台の人数に大きく影響するような数ではないと考えます。

佐伯会長 大久保小学校の予定地を活用するということは、18年度の学区編制を元に戻すことと併せて考えなければいけないということになりますよね。

川名委員 通学距離から見ても、移転したら波岡小に通うのは無理がありますね。
佐伯会長 その地域は、住宅はどうですか。

山口主査 港南台です。住宅は今張りつき中で、やや落ち着いてきたかというところですよ。

川名委員 羽鳥野地区の今後の見通しはありますか。

星野副課長 第3回の審議会の資料2-2をご覧ください。

人口の伸びている地区をピックアップしたデータで、あくまでも現状と推計ですが、見ていただきますと、烏田土地区画整理組合のところ、平成7年から17年の事業年度で、計画人口が8,000人、宅地面積が63.3ヘクタール、平成21年4月現在で2,226人の人口ということで、計画人口に対しての進捗は27.83パーセントです。

現在もかなり伸びていると思われま。

川名委員 八幡台小はこのままだと大規模校に向かっていくわけですよ、この解消は考えたほうが良いと思います。そうすると、可能であれば、大久保小学校用地に、羽鳥野の増の分を吸収しながら波岡小を移転する。となると、18年度に動いた港南台の一部は畑沢小に戻さないと無理があるかなと思います。将来的にみても一番可能性のある良い方向かなと思います。

金子委員 羽鳥野のデータとして、公民館の広報ですけれども、12月1日で人口が2,461ですから、4月から200くらい増えていると思います。

シミュレーションで羽鳥野の5・6・7丁目が波岡小に行った場合が出ていますが、さきほどの西清小と同じで、今羽鳥野は1・2・3丁目がどんどん増えていて、その結果八幡台小の学級数が増えているというふうに思っています。

羽鳥野は確かに高速道路が通っていますが、一体になった地域ですので、羽鳥野としては一つのところへ通えるほうが良いのかなとも思いますけれども、大久保小学校予定地を活用するプランが可能になれば、波岡小のことも一挙に解決するのかなと思います。羽鳥野は5・6・7丁

目と1・2・3丁目に分かれる形になるかもしれないけれども、良いプランだと思います。

佐伯会長 大久保小学校予定地については、活用を考えたほうがよいことで、波岡小学校は将来的には大久保小学校予定地へ移転をする。八幡台小学校との学区も併せて見直して、羽鳥野地区の一部を組み込むこと、そして平成18年度の学区編制で畑沢小学校から波岡小学校の学区になった地域を畑沢小学校に戻すといった学区の再編を行うということが良いのではないかとこの結論としたいと思います。

石渡委員 そうすると、移転してもとの波岡小学校はなくなるということですか。将来、学校を移してまた復活するということはあるのか、市の財産としてもったいないような気がするのですが。この小学校はもう将来的に使わないというようなことなのでしょうか。

星野副課長 波岡小を大久保小用地に移転するとした場合、現在の波岡小学校は学校としてはなくなるということになります。名称等は今後の話になりますが、見通しとして申し上げた場合には、仮に大久保小学校用地へ波岡小が移転すれば、今の小学校が必要になるかという点については、現在の人口の張りつきからみた段階では3つの小学校で可能かと考えます。

ただし、羽鳥野地区・港南台地区の空き地にほとんど住宅が埋まるような爆発的な社会増があった場合には、データがありませんので、4校目が要るかということについては申し上げられません。

石渡委員 波岡小は非常に伝統があるので、もったいないと。学校の機能として何か使えないかなという個人的な思いがあります。

金子委員 前回の私の発言なのですが、長いスパンでといてみましたけれども、これはかなり難しいことですよ。データをみても、これからでなければはっきりしたことは推し量れないので、かなり難しいことを言ってしまったと反省しています。

それから、八幡台の発展する様子を調べてみたのですが、八幡台小が開設して7年くらいでピークを迎えました。その後10年くらいはそのピークが続いて、15年から17年くらいは600前後で続いておりました。地図を見ると羽鳥野のほうが八幡台よりもいづらか地域として小さいような気もしますが、八幡台のことは参考になるかと思えます。

ただ、若い人たちが羽鳥野地域にはどんどん入っている印象を受けます。

佐伯会長 ありがとうございます。では、次に東清小学校の検討に入りたいと思います。この学校は、現時点で適正規模から著しくはずれた、過小規模校であるということ認識しているわけですが、前回の審議では、落ち着いた雰囲気学びたい子どもたちを通わせるとか、子どもたちがたくさんいる中で育てるよりも、閑静な学校に通わせたいという需要に応じていくといった意見がありました。制度としても、特色ある教育活動を行う小規模の小学校が、通学区域を広げて児童の入学を許可できるもの

があるということですので、児童数を増やして適正規模の学校として存続させていくといううえでは、大切な視点だと思います。ただ、現実問題として、東清小の適正配置に有効かどうかということになると、近い将来複式学級が予想されるなかで、どういうふうにしていったらよいのだろうかということ、もう一度考えたほうがよいのではないかと思います。

東清小の隣接校の祇園小は大規模校、南清小学校は今は小規模校ですね。

山口主査 はい。ただ南清小学校の学区には区画整理の地域がありますので、適正規模に向かっている可能性があるという予測です。

星野副課長 改めて東清小の状況を申し上げますと、本年度65名、見通しでは平成27年度に55名の児童数を予想していきまして、当然のことながら、各学年1学級という小さな小学校です。

佐伯会長 10名減ってしまうという予想ですね。これから更に人数が減ってしまうことが考えられる、非常に小規模な学校ということで、例えば統合するとすると、祇園小は大規模校ですから、南清小と統合することが考えられるのではないかとということになります。そうすると、通学距離はすごく長くなるのでしょうか。

竹内副課長 通学距離ですが、笹子地区からの最長距離は約3.7キロメートル、椿地区からの最長距離は3.9キロメートルで、4キロ以内には収まっています。

佐伯会長 安全性はどうですか。

竹内副課長 道路は整備されていますが、人や車の通りが少なく、街路灯も少ないため、安全とはいえないところもあります。

石渡委員 隣接する南清小学校の児童が、東清小学校に通うことができないかという提案をしましたが、既存の施設をまず基盤にして考えていくと、確かに交通面で良好な状況ではないのですが、木更津第二小学校では桜井地区の児童がバス通学をしていると思いますので、こういった必要性のあるところにバス路線を設けて、東清小学校に、南清小学校のお子さんたちが行って勉強するということができるのではないかと思います。

佐伯会長 バスなどを使えば南清小学校の児童が東清小学校に通えるのではないかとということですね。

南清小学校も今は小規模校で児童数は多くないですよ。南清小の規模が大規模であれば考えられるとしても、ちょっと難しい部分もありますね。

逆に、東清小からバスを使ってでも、南清小に子どもたちを運ぶということはできないのでしょうか。

川名委員 校舎の問題があるのかと思います。施設をみると、南清小は非常に小さいのです。1学級20人くらいの規模で作られたような教室で、30人、40人の学級はプレハブ校舎の教室だと思います。東清小は40人

規模で作られた教室なので、学校としては東清小学校のほうが立派です。ですから、南清小学校に新しい校舎を作らずに、東清小に運ぼうという発想ですよ。

青柳委員

ですが300人をバスで運ぶのはかなり無理があるかなと思います。小規模校・大規模校のメリット・デメリットを見ると、断定できないとはいうものの、あてはまるものも多いと思います。

交友関係が固定化されるとか、競争心が育ちにくいとか、私が東清小学校にいたときには、やはりデメリットを感じました。

時代によっても子どもの質や実態はいろいろと変わってくるので、小規模校でも個性を発揮できる場合もありますが、子どものマイナス面をずっと持ち続けたりということもあつたりしましたので、やはり、統合という方向にいったほうが子どもたちにとっては切磋琢磨されていいのかなと思いました。

統合するとなれば、バス通学で南清小に行くしか考えられないのかなと思います。

佐伯会長

統合ということは考えたほうが良いのではないかということですね。ただ、施設として、東清小はキャパがあるけれども、南清小はそうでもないということのデメリットが大きな問題としてあるようですが。

星野副課長

施設についてですが、仮に南清小の児童が一部東清小に行く場合、東清小に教室があるかということを確認しますと、東清小は余裕教室が1となっています。各学級の子どもたちの人数が少ないので、学級数が増えなければある程度は耐えられますけれども、学級数という面で、清見台小や祇園小のような大きな学校のように余裕教室を抱えていません。

南清小学校につきましては、児童数の急増がありまして、平成20年度に3教室のプレハブを増築、来年以降も目の前の児童数の増加に伴っての施設整備に着手していく予定です。

佐伯会長

東清小学校と南清小学校の統合が妥当ですが、通学の安全性はバスを使うなどして確保すること、それから施設の余裕を考えても、東清小が南清小に統合されるという形の結論になると思います。

《休 憩》

佐伯会長

次に検討するのは波岡中学校についてです。

前回の審議では、八幡台中学校予定地と八幡台小学校を一括活用して小中一貫校的な使い方を考えてはどうかというご意見がありました。

まず、八幡台小学校の児童数の推移から、今後の波岡中学校の規模と、教室数などの施設が足りるかどうかを確認する必要があると思います。事務局説明をお願いします。

安見主査

まず今後の波岡中学校の規模について説明します。

6 ページ①の表をご覧ください。波岡中学校は八幡台小学区の全部と波岡小学区の一部からなっています。21年度8学級、32年度にやっと12学級の適正規模になる予測です。こちらの地区は羽鳥野という人口が増えている地域を抱えているのですが、適正規模の12学級から18学級というのは、中学校は3学年ですので、1学年について4学級から6学級が適正規模の範囲ということで、各学年それぞれ80人から90人増えたとしても、適正規模の範囲内ですので、規模的には問題はないと思われます。

次に②の表をご覧ください。八幡台中学校予定地を活用して八幡台中学校を建てた場合、この中学校には八幡台小学校の児童が行くようになると思います。学級数でみると、21年度6学級、33年度まで見ても、11学級という小規模校です。羽鳥野が増えたとしても、適正規模に収まると予測されます。

では八幡台中学校ができた場合、波岡中学校はどうか、③の表をご覧ください。波岡中学校に進学するのは波岡小学校の一部の児童だけになりますので、1学年1学級、学校全体としても3学級の過小規模校となってしまいます。

佐伯会長 八幡台中学校予定地に中学校を新設すると、小規模校が二つできてしまうということですね。

山口委員 この学校については、33年度まで12学級の適正規模で通学の問題がなければ、現状でどうかなと思います。

川名委員 賛成です。

佐伯会長 波岡中学校は現状のままで特に問題はなくて、八幡台中学校予定地は活用の可能性は低いとの結論ですね。

次に清見台小学校について検討をしたいと思います。

今回は他の学校との関わりのなかで必要性が生じたときに考えましょうということ、結論を出すことはなかったのですが、清見台小学校は大規模校です。何か適正規模の方策をとることができますでしょうか。

池田委員 隣接している祇園小学校も請西小学校も、両方とも大規模校ですから、今の状況で推移したほうが良いのではないかという感じがします。

佐伯会長 大規模校ではあるものの、当面は現状維持という結論ですね。

次は、木更津第二中学校について検討をしたいと思います。

適正規模校です。ところが、請西地区の人口増加によって大規模化する可能性が非常に出てきている学校です。それに、太田中学校との境界で気になるところがあります。そこで、真舟中学校の予定地の活用を含めて、もう一度検討をしたいと思います。

現在、木更津第二中学校は木更津第二小学校と請西小学校の児童が進学しています。それで、請西小の児童は第二中学校と太田中学校に分か

れます。つまり請西小の児童は二つの中学に分かれる。請西小学校はすでにかなりの大規模校になっていますから、一つの小学校から一つの中学校へという考えで、木更津第二中学校か太田中学校のどちらか一方で抱えるというのは難しいでしょうか。事務局どうですか。

星野副課長

現在の第二中学校の学区で、今後予想される生徒数、学級数の見込みと、請西小学校の全ての児童を木更津第二中学校へ進学させた場合でシミュレーションしました。

平成22年度から平成24年度にかけての3学年を見ますと、木更津第二小学校と請西小学校の全ての児童が進学した場合、716名、20学級という状況となります。

今後の推移をみますと、平成29年度には775名で22学級の大規模校ということがシミュレーションで出されています。

同じように、一つの小学校から全ての子どもたちが一つの中学校へということで、請西小学校から太田中学校に進学した場合のシミュレーションですが、現在の通学区域で平成24年度をみますと556名で16学級の適正規模、そして請西小学校から全て太田中学校へ進学すると24年度で740名、22学級で、やはり大規模な中学校になってしまうということが出されています。また、一つの小学校から一つの中学校へということで、施設的にはどうかという観点からみても、容量オーバーとなってしまいます。

本審議会が、地域的な観点などをふまえて大規模校も許容であるという考え方も一部例外的にあるのであれば、一つの小学校から一つの中学校という基本を追求していけば、物理的には増築したりしてかなえられるかもしれませんが、木更津第二中学校は、現在グラウンドが狭いという課題もありますので、総合的にご勘案いただければと思います。

佐伯会長

どちらか一方で抱えるのは難しいということがわかりました。そうすると、真舟中学校予定地の活用で何らかの解決方法がないか、事務局でシミュレーションできますか。

星野副課長

木更津第二小学校と請西小学校と清見台小学校の3つの小学校のエリアで、中学校の適正配置をしていこうというシミュレーションにおいて、真舟中学校予定地をどのように生かしていけるのかという説明をさせていただきます。

まず、基本に考えていただきたいのは、適正配置をするうえで、一つの小学校はできるだけ一つの中学校に進学すべきであろうということが1点目です。これは現在請西小学校が現在太田中学校と木更津第二中学校に分かれて進学している課題があります。

2点目ですが、請西小学校は、住宅のはりつきがだいぶありまして、現在大規模校であるのが、更なる大規模化が予定されているなかで、真舟小学校用地を生かせば、請西小学校の更なる大規模化を分けることができるであろうという方向で結論をいただいているところでして、この2点を

ベースに説明をしていきます。

二つの中学校エリアに、子どもたちがどれくらいいるのか、今後見込みとしてどうかということで、清見台小学校、請西小学校、木更津第二小学校でこのエリアを形成していきまして、請西小学校が別れていますが、平成22年度で、子どもたちは350人、これは学年での話ですので、中学校でいえばこのおおよそ3倍と考えることができると思います。

今後の数値で、28年度をみますと391人、これを3学年の総数で見ると、今後見通しとしては、1,000人から1,100人の中学生がこのエリアにいるということがわかると思います。

学校予定地の活用ということですが、中学校の数ということで、この現在2つの中学校に3つ目の中学校を新設するとした場合、中学生の人数を3で割りますと、約300名から360名規模の中学校在3つできることとなります。この規模はどうかということ、100名から120名ですと、3クラスから4クラスということになりまして、全校で9クラスから12クラスということで、必ずしも全ての学校が適正規模の12学級を構成できる状況にはならないのではないかといいえます。

現在の第二中学校を移転して、学校数は二つのままでこのエリアの子どもたちを抱えられるのかという観点でみると、中学生が1,000人から1,100人ということは、500人から600人の規模の中学校在2つできる、この規模は学年で約200人、1学年が5学級から6学級、全体で15から18ということで、二つの中学校は、単純な数からいえば、適正規模の中におさまってくるということがいえるかだと思います。

これは学校予定地を有効活用して、中学校を三つにするのか、二つにするのかということで整理をして、三つ中学校を作ってしまった場合、通学区の見直し等によっては、少なくとも一つの学校、あるいは幾つかの学校が必ず小規模校になってしまうだろうということが言えるということです。ここで忘れてはいけないのは、何分請西の東、請西の南という現在人口が張りついているところが、今後どれだけ増えていくかということによっては、一時的にはありますけれども、3校が適正規模の学校になるかもしれないということがいえると思います。

次に、このエリアのなかで、請西小学校を二つに分けなければならないということが課題ですが、そうした場合、シミュレーションでは四つの小学校がこのエリアを構成していて、二つの中学校で適正規模校が賄っていけるということからしますと、二つの小学校が一つの中学校ということで、木更津第二小学校と、仮称ですが真舟小学校のエリアを作って、この二つの小学校が、移転後の木更津第二中学校に行くと、そして、分割された小さくなった請西小学校と、清見台小学校が太田中学校に通うということで、基本的な事項としての1小学校から1中学校がカバーできるようになります。

その具体的なシミュレーションとして、真舟中学校予定地に木更津第二

中学校を移転した場合、新しい真舟小学校が出来た場合の太田中学校と木更津第二中学校の生徒数、学級数の推移をシミュレーションしてみました。

仮に真舟小学校の学区をこの地域に作ってみた場合、新木更津第二小学区、新真舟小学区、分割後の請西小学区、そして清見台小は変わらずそのまま、この四つの小学校の学区で、平成24年度の太田中学校がどのようになるかという、553名、16学級の適正規模校ということになります。また今後の推移をみてみますと、平成27年度は569名、17学級となります。

木更津第二中学校をみますと、平成24年度で総生徒数510名、学級数15、そしてピークは平成29年度、576名、17学級ということで、現在の人口のはりつき具合から、仮にはありますが、新設の小学校のエリアを設定した結果として、太田中学校と、移転後の木更津第二中学校がいずれも適正規模になる。そして、このエリアについては四つの小学校、二つの中学校で再編がシミュレーション上できるのではないかとということです。

なお、これは非常にデリケートでして、仮称真舟小学校の通学区域を大字別に示しまして年齢別にひろいましたが、大字の請西南の1から5は、平成21年10月1日現在ではまだまだ子どもたちが少ない、このような状況です。このような状況であっても、現在の仮の線引きでは平成21年度で約600人、平成27年度をみますと、650人、20学級という大規模校、ここにはりつきが更に進めば、更に大規模化ということが想定されますので、この辺については、考え方として、基本的な事項を踏まえたうえで新しい小学校の設置をしていくとするならば、このような考え方のできるのではないかとことのシミュレーションです。

なお、11ページを見ていただきますと、分割された請西小学校は平成21年度414名、平成27年度は384名ということで、現在の半分以下になってしまうところがありますが、今ここで切るとかいう話ではありませんので、考え方として、請西小が1,000人を越えるような学校になる、そして分割、新しい学校が必要ではないかというお話とあわせて、学校予定地の活用、中学校をどう適正配置をしていくのかという観点を全て踏まえた中でシミュレーションしましたので、ご審議をいただければと思います。

佐伯会長

あくまでも真舟小学校を新設するという審議結果を踏まえてのことになるわけですがけれども、現在の中学校の位置をみると、仮称真舟小学校の児童が進学することを考えると、現在の場所よりも、真舟中学校予定地にあるほうが配置として適当ではないか。それから請西地区の人口が増えることによって、木更津第二中学校の生徒数が増加することが予測されていて、今ですと敷地のかたちによって十分な運動場が確保できないといった課題がありますが、真舟中学校予定地に移転をしますと、そのへんの課題が解消される。つまり、木更津第二中学校と太田中学校の適正規模を確保

して、不自然な通学区域を解消しながら、一つの小学校から一つの中学校へということを実現するためにも、現在ある木更津第二中学校を真舟中学校予定地に移転したほうがよいのではないかと。どうでしょうか。

石渡委員 真舟小学校は新しくつくるということで、小さいお子さんが、6時45分頃出て1時間以上かかって請西南のほうから請西小学校に通っているということを知りましたので、これはやはり必要だと思いますが、第二中学校が移転した場合、第二中学校の学区の端のほうの生徒が通うにはどのくらいの距離があるのでしょうか。かなりの距離があるように思うのです。部活動があったときにはかなり早く出発しなければ到達しないのではないかと。

高澤参事 中学校ですから、自転車通学の生徒が考えられるかと思います。近隣の中学校においても、富来田中学校を含めて、かなり遠方から自転車通学をしています。以前は畑沢中も波岡中もなく、全部二中の学区でしたが、自転車通学をしていました。

石渡委員 坂なんですよ。坂道を自転車でというのは大変だと、実感しています。
安見主査 真舟中学校までの、学区で一番遠いところ、新田の端からの距離は3.2から3.5キロです。

佐伯会長 4キロ以内ですね。でも坂が多いと。

川名委員 今二中に真舟から通っている子は、朝はよくても帰りは坂を上っていますから、それは全く変わりないと思います。

加藤委員 さきほどシミュレーションでありました2中学校と4小学校、財政的に許されるならば望ましいのではないかと思います。

ただ平成33年度以降の数字を予想すると、全体的に少子化が進んでいくかと思いますので、逆に今度は減少傾向がみられてくるということも予想されます。現状を考えれば、2中学校4小学校は望ましいと思います。

佐伯会長 それでは、真舟小学校予定地に小学校を新設ということをも前提としたうえで、真舟中学校予定地へ第二中学校を移転ということ、通学区域の見直しを検討するという結論とします。

以上で前回結論がはっきりと出なかった学校の検討を終了しました。その他の学校につきましても、中間答申構成案の内容に、再度検討を加えたほうがよいというところがありましたらご意見をお願いします。

今回は前回の審議を補う形での検討をしました。今回の内容も含めまして、中間答申案を作成して、次回の審議会の前までに委員の皆さんにお届けしたいと思っています。

次回は2月を予定しております。

よろしくご意見申し上げます。

5 その他

佐伯会長
露崎次長

何か事務局からありますか。

木更津第三中学校の校舎改築に伴う予算について、12月市議会に上程して、12月16日に議決をされましたので報告いたします。

前回、この事業については公共投資臨時交付金の決定をみてから予算を上程すると説明をしましたが、このたび市長部局の了解を得て、臨時交付金の決定がない状況のなかで、予算案の提案について了解をいただき、議決をいただきました。

ちなみに予算額ですが、改築事業費は総額14億3,791万円、財源内訳は、国の補助金、一つは安心安全な学校づくり交付金が4億400万円、もう一つは公立学校施設整備費国庫負担金、5,981万1千円で、国からの補助金については4億6,381万1千円です。それと、市債が8億3,540万円、一般財源が1億3,861万9千円という状況です。

なお、公共投資臨時交付金の額については、現時点では未定ですが、約4億円を見込んでおります。今後、公共投資臨時交付金の交付額の決定を受けて、財源の組換えを行うこととなります。

佐伯会長
川名委員

他になにかありますか。

これまでの審議で、学区の編制という話が上がっていますよね。学区を変えるときに、できれば社会教育関係の組織、公民館だとか、住民会議などをうまく連動させて、一緒に進めてもらえるとありがたいなと思います。

平成18年度の学区再編のときに太田中学校にいたのですが、住民会議のエリアと子どもがくるエリアが合わないのです。新たに入った請西東の住民会議には太田中は参入していない。むしろ太田中のことを知ってもらいたいのは新しく来る請西東の地域で、前からの清見台小学校の地域の方は太田中については理解していますが、新しく来た方は太田中学校はどんな学校だろうと疑問に思いながらくることとなりますから、地域の教育機関とか組織がうまく連動していくと、つながりが深まっていくのではないかと思います。

6 閉 会

佐伯会長

長い時間にわたりまして貴重なご意見をありがとうございました。

以上をもちまして、第5回木更津市立小中学校適正規模等審議会を閉会します。

以 上

上記会議録を証するため下記署名する。

平成22年1月21日

木更津市立小中学校適正規模等審議会会長

《会 長 署 名》